

## —若手技術者のコーナー—

## 復興事業からの経験とこれからへ

## 1. はじめに

平成25年に山梨県庁に入庁し、最初の事務所にて道路改良担当を2年、道路維持担当を1年経験したのち、初めての人事異動で岩手県宮古市の宮古土木センターへの派遣となった。派遣が行われるきっかけとなった東日本大震災は私が大学在学時代に発生し、そのときから現地の状況を知りたいという気持ちが強くなり、また就職後も復興の状況に興味を持っていたため、異動希望調査の際に派遣を希望した。本稿では、岩手県での業務を通し感じたこと、現地の状況を直に見て感じたことを書いていきたい。

## 2. 岩手県での業務

派遣先の宮古土木センターは、宮古市と山田町の2市町村を管轄しており、道路事業、河川事業、港湾事業等を行っている。私は、港湾施設の維持管理を担当している港湾施設チームに配属され、主に担当した事業は被災した港湾施設の復旧事業であった。港湾施設の復旧事業の中で私が携わったのは、東日本大震災により地盤沈下した野積場の復旧事業である。野積場とは海上輸送等により運ばれてきた資材の荷さばきや一時保管を行う施設である。復旧作業を行う野積場では、土木事業では欠かせない砕石や陸上運搬が困難で海上運搬されてきた資材の保管が行われており、施設の復旧が遅れると、一度に搬入される資材量の制限が生じ、復旧・復興事業の遅れにつながる懸念された。そのため、事業を進める上で最も重要となったのが、荷さばき業者や運搬業者等との調整であった。調整の中では思い通りに行かず工事が止まってしまうこともあり、調整の難しさや重要性を痛感した。



野積場着工前(地盤沈下により路面排水機能を損傷)



野積場完成後(高上げにより路面排水機能を回復)

## 3. 現地で感じたこと

地域の方はみんな前向きで復興に全力で向き合っていると感じた。また、復興事業が目に見える形で進捗しており、被災した道路、河川、港湾施設が復旧されることで産業に活気が戻り、観光地としての魅力を取り戻していると感じた。

微力ではあるが、復興事業に携われたことを嬉しく思うと共に、改めて公共事業の必要性や重要性を感じることができた。

## 4. おわりに

岩手県での業務では、これまで山梨県では経験できていなかった大規模災害の復興事業をはじめ、私にとって貴重な経験ができた。

現在山梨県では、何年もの間、大きな災害は発生していないが、富士山噴火や南海トラフ地震の発生による被害、また、近年の異常気象による水害等が懸念される。災害を事前に予測することは難しいかもしれないが、岩手県での業務を通し学んだ経験を活かし、日々の業務に臨みたい。

また、現地を直に見て感じた、公共事業の必要性や重要性についても常に考え、山梨県の今後のさらなる発展につなげていきたい。



(山梨県 県土整備部 峡東建設事務所 長田 慎也)